

『ふらんす』臨時増刊号 2002. 4

フランスを知るためのブックガイド

西山教行

ことばを学ぶとき、その国の文化を無視することはできない。単語一つ一つには文化の重みが蓄積されているのだから、外国語学習そのものが文化を考えることにもつながる。

だがこれと平行して、フランス文化を日本語で読み解くのも大切なことだ。そこで、「フランスを知る」ための最近の「教材」を硬軟取り混ぜて紹介したい。

フランスとはどのような国か、フランス人とは誰か、この全体像をとらえるために西永良成『変貌するフランス』（日本放送協会、1998年）をすすめたい。本書は、フランス人の多様性、フランス語の形成、フランス社会の変化、宗教生活に見るモラルの変遷、「自由・芸術・個人主義の国」として日本人が仰ぎ見てきたフランスの現在などを簡潔にまとめている。これまでフランスが国是としてきた普遍的「文明」から、個別的「文化」擁護への政策転換は、共和国の変貌を伝えるものだ。また日本人のフランス（人）へ向けるまなざしに加えて、作家デュトールの著作を手がかりに、フランス人が今日に至るまで日本をどのように見てきたのかも明らかにし、著者は日仏のまなざしを交差させることに成功している。

フランスはこれまで「（カトリック）教会の長女」の名を誇ってきたが、今や教会の権威は弱体化し、家族制度は大きく揺らいでいる。ミュリエル・ジョリヴェ『フランス 新・男と女』（平凡社新書、2001年）は、男女の関わりと結婚制度の結びつきを自由にした社会を具体的な証言により描く。たとえば、1999年に導入された「市民連帯契約法（パックス）」（フランス語の略号で PACS）は、結婚していない男女の継続的関係を法律が保護するだけでなく、ホモセクシュアルなど同性間の関係をも社会的に保護するものだ。結婚についても、子連れ離婚者同士がふたたび婚姻関係を結び、新たに子供を作るといった「複合家族」も珍しいケースではない。

文化の中では食も忘れてはならない。宇田川悟『フランス料理は進化する』（文春新書、2001年）は文化としての料理の歴史を手短かにまとめる。著者は料理をめぐるマイクロコスモスから出発し、フランスとは何か、フランス人とはどのような人々かに迫る。なかでも、著者がロンドンにフレンチレストランを開業し、ミシュランの星を獲得するまでの経緯は、フランス人シェフと日本人オーナーの職業観などの相違をかいま見せるものだ。

日仏の文化ギャップはカルチャーショックにいたることもある。太田博昭『パリ症候群』（トラベルジャーナル社、1991年）の提起した問題は、刊行から10年あまりを経た今日でも解決を見たとは言い難い。日本人のコミュニケーションパターンを以心伝心型とすれば、フランス人は議論説得型であり、このずれは「パリ症候群」と呼ばれるカルチャーショックを生み出す。本書は日本人との関わりから見たフランス人の心理を探るもので、フランス語学習者にも役立つヒントが多くある。

政治を切り口にして、フランス人やフランスを考えるのであれば、山口昌子『大国フランスの不思議』（角川書店、2001年）が最新情勢を伝えている。経済力の点では日本の後方にあるフラ

ンスが、国際社会においてなぜアメリカと並ぶほどの発言力を維持できるのか、著者はその謎を「共和国」をキーワードとして、軍事、外交、国民統合、教育のあり方に求める。

ここまでフランスを深めてこられた方には、三浦信孝編『普遍性か差異か：共和主義の臨界、フランス』（藤原書店、2001年）に是非チャレンジしてもらいたい。これは、フランス革命以来、普遍主義をかかげてきたフランスが、グローバル化に対抗する思潮としての多文化主義をどのように受容し、また抵抗しているのか、国民のあり方、歴史の記憶、家族制度の変容、言語など共和国の根幹に関わるテーマを中心に、フランスの知識人がここ数年論じてきた問題を掘り下げ、日本のフランス学の現在を示すものだ。

この一連の著作は、フランスやフランス人とは何かを明らかにすると同時に、日本人が現在フランスをどのように見ているのか、読者はまなごしの政治学をも実践することができよう。

『ふらんす』臨時増刊号 2002年4月、42-45p